

# 瓜哇佛教史の研究

藤井 周 慶

蓋し瓜哇の佛教史たるや吾人の前に提供せられた一大エニグマでなければならぬ。口碑及數多貝葉の上に残れる奇怪なる事少なからざる傳説と現今處々に散在する幾多の考古學的資料とを除いては之れを明査するに由なく、またかのラッフルス以來、地理學、人種學乃至考古學に關する此れが研究發表に於て纔かの暗示を得るの外、吾人は不幸にして何等學的先蹤をば有してをらぬ。故に會々之れが攻究に着手せんには宛も曠野に旅するものゝ如く甚だ漠然たるものあつて、その方向すらも定め難い。偕多少大膽な企てがあるかも知れぬが予は便宜上此を五期に分つて考察しよう。

第一期 佛教渡來以前

第二期 原始佛教時代

第三期 大乘顯教時代

第四期 祕密佛教時代

第五期 佛教滅亡より現代まで

此の中第一期とは有史以來、總ての文獻學、考古學上の考證よりして未だ佛教の此島に存在しなかつたと認めらるゝ間、具體的に云へば婆陀伽王の改宗まで、第二期はこれ亦所謂小乗即ち原始佛教就中說一切有部の思想が主勢を占めてゐたと推測さるゝもの、その三はシャカ族此處に移民して大乘思想隆んであつた時、それよりかの婆羅門教が印度本土と殆んど併行して殷となりし結果、主として祕密的佛教奉せられし時代をば假りに前期と區別して祕密佛教期と呼び、最後に回教侵略によつて本島に佛教亡び僅かにロンボック・バリ島にその命脈を保つて今日に至つたものである。但し爰に特に注意せねばならぬのは此の島に中央集權的政治の行はれたと考へられるのは少くともマジャパヒツツ朝以前にあつては極めて稀であつて、その多くは處々に公侯會長等各自に割據して種々な政態にあつたのであるから必ずしも之れを一律することは出来ぬ。今は唯叙述の便宜上その代表的のものに就き、その跡づけ得らるゝ程度に止めたものであるから、若し之れをば我が日本佛教史に於けると同一の頭で以て考へて行くならば却つて誤解を生ずることが少くないと思ふ。(但しこゝに顯教時代とは雜密教即ち釋迦中心の密教にして未だタントラ風ならざるものをも含む。)

1 A. D. 750 or 78—A. D. a. 420)

最初吾人に領知せらるゝジャワの消息は印度瞻波四國(中印度占城緬及瓜哇)の傳説であるが(西城十六P、唐書南蠻傳攻)それよりも寧史的確實性に富むものは支那郡國利病書に傳ふるものであらうと思はれる。

それによれば東漢光武皇帝の時に (A. D. 25—57)、印度より殖民せりと言ふ。然し如何なる民族が何れの地より來たか更に判然しないが會々此の島の傳説 (Nata Kus'na 集のマスクリプト今ラツフルスに依る) を見るに頗るこれに似たるものがある。印度より Tristana なる婆羅門族の人、數多の從者を將ひて來り、此處に本土の宗教と藝術とを傳へて、自ら Giling West に王となりその苗裔相繼いだことを記してゐる。これを以てラツフルス氏は紀元一世紀とし、現今の諸學者は七五——七八なるデートとを考證してゐる。併しこれは何等かより以上の確たる支證なき限りその傳説からして之れをば後年のアジ・サカ書なるそれと混同してゐると認めらるゝ因子をば抜きにしなければならぬが、先きの支那文獻及其後宋書や梁傳等に出づる王が純粹印度的稱號を用ふるよりしてこの紀元一世紀年代若しくはその前後に於て幾分這般の事實ありと認め得らるゝと思ふ。又 Aji-jaya Baya の記錄にクリングの王子によつて二萬人送られグイラタ王朝を始むとある。なほ又キヤムベル氏はかのスエデン探險家クリーンの婆里調查報告書とも言ふべし Mudria, the ritual hand-Poses of the Buddha Priest and the Shiva Priest of Bali に序して、往古より埃及波斯と極東との交通、印度と印度附近の群島との關係があつたことを述べて紀元第一世紀以前の殖民を認めてゐるは良いが之れをアジ・シヤカと混同して北印度人としてゐるは首肯出來ぬ。故に予は寧ろ前後二度の大移民を考へその第一は南印度カリンガよりのそれであるとす。カリンガは古へは非常な強國で一時阿育

王のために蹂躪されたけれども猶ほ此の時代は隆んに通商してゐたのであるからそれが瓜哇島を迅に知つてゐたことも想像さるゝ其後法顯が此處を訪ふた際 (A. D. 414) 外道婆羅門教のみで一向佛教の行はれなかつたことを報告してゐる (法顯傳<sup>致六</sup>八右) が。事實、此の時代には知識階級は兎に角民間には、地・火・山・岳・森精等を崇拜する所謂『アニミズム』てふ低級な宗教思想の流行してゐたのである。然るに宋書九十七五丁によれば閻婆婆達國王師黎婆達陀阿羅跋摩 *Siri Vajra-dvāra-varman* が元嘉十二年 (A. D. 435) に使を宋に遣してゐる (宋史四百八十九十一丁記之)。その表文を見るに、

宋國大王大吉天子足下敬禮

一切種智安穩、天人師降伏四魔成等正覺、轉尊法輪度脫衆生、教化已周、入于涅槃。舍利流布起無量塔衆寶莊嚴如須彌山。經法流布如日照明。無量淨僧猶如列宿。國界廣大民人衆多。宮殿城郭如忉利天。名大宋揚州<sup>△</sup>大國大吉天子安處、其中紹繼先聖王有四海。閻淨提內莫不來報。……今遣使主佛大陀婆副使葛抵奉宣微誠、稽首敬禮大吉天子足下。施婆所啓云云

とある。仲々振つた文句だが、之れによれば此の王は隨分佛教の素養もあり、且つその敬虔な態度は以て王の持つてゐた文化の程度を察するに足る。もし法顯の視察にして誤り無しとし、兩者が同一國を指したものだ云ふ前提に立つならば彼此僅か二十年を隔てざるに此くの如く佛教に於ける形勢一變せるは誠に不思議と言はねばならぬ。此處に於て我々は求那跋摩の功績を多分に認めねば



ならぬと共に之れを以て此島に於ける佛教の濫觴とするものである。

11 (A. D. a. 420—A. D. 603 ar 685)

求那跋摩三藏の事蹟に關しては既に佛蘭西のペリオ等も注意してゐるが (Peliot; B. E. F. E. O. IV. 274, de Beylie L/Architecture hindore en Extreme Orient P. 335.) 出三藏記集<sup>結</sup>十<sup>五十九</sup>等には單に元嘉八年 (A. D. 431) に來宋、揚州にて譯經事業に従事したことを載せてゐるが、梁傳<sup>結</sup>三<sup>十五</sup>右開元錄<sup>結</sup>五<sup>四十三</sup>右には元嘉元年 (A. D. 424) 以前、既にジャワ王を教化し、王及一同皆受戒し、且つ爲めに精舎を建てしめた事情が詳しく記されてゐる。そこで跋摩も此處に滞在して教化傳導する心算であつたが、彼れの名聲を聞いて宋文帝は元嘉元年九月彼れ及び國王に遣使致書して彼れを迎へんことを懇請した。で、此處に出づる婆多伽は若し之れをば先きに述べた *Vatadhāna varman* 王と同一人だらうと私は想像する。何となれば傳に畫かれてゐる此の王は如何にも少壯であつたものゝ如く、悲母の訓誡により佛教に歸してからは自ら出家せんとしたが、臣民の哀願もだし難く竟に三願を誓はしめて思ひ止まり、その寺堂建立に當つては努力の極自ら傷くまでなした篤信家であればこそ獨り此くの如き立派な表文も作り得たものであらうし、此の王が猶ほ十餘年王位を保つてゐて、更に先きの宋よりの遣使に對する答禮の意味も兼ねて書を贈つたものと想像するは極めて容易である。更に彼れの婆達陀阿跋摩<sup>△△</sup>の號は或は授戒師求那跋摩<sup>△△</sup>より得たものであるかも知れぬ。何れにし

ても、彼等の宗教は求那跋摩の周圍の事情から見ても、原始佛教——少なくとも原始佛教特に根本有部思想を中心とするものでなければならぬ。勿論、師が咒法を行ふことは我々が傳譯時代の支那佛教史上に屢々見受けらるゝ如く、宗教宣傳師が異國民を化するための常套手段に過ぎない。

更に之れより二世紀半を経て、會々印度南海の長旅を卒へて唐證聖元年 (A. D. 695) に洛陽に歸つた義淨がスマトラの師利佛逝に滞在中故國の友にもしたと言ふ南海寄歸傳序文(致六十八右)に、婆魯師・末羅迦・戸利佛逝・莫訶信・訶陵・咀咀・盆盆・婆里・堀倫・佛逝補羅・阿善・末迦漫の南海十餘州◎◎純ら小乘有部なるを述べてゐる。勿論この時代は政治上分割統治の状態にあつたと見えて、隋書以後唐の初期に關する文獻には『闍婆』てふ名は出てゐないが、訶陵州や阿都州佛逝補羅等はその位置からして瓜哇本島を指すものと思はれるから、(唐書南蠻傳に依る)先づこの時まで二百七十餘年間此處の佛教界は原始佛教少くとも有部を中心とする小乗教の獨り舞臺であつたと云はねばならぬ。然るにこゝに注目すべきはメナム・カーブ刻文である。これは Faendericks; Verhandeligen Vol. XXVI 等に紹介されて考古學界で知られてゐるスマトラの西南部 Meng-labu 101°E 2°S に在つて一般に之れをば西紀六五六年に日附けてゐるが、その中に當時瓜哇を治めてゐた Prathamana の名が純梵語で Mahirajadhiraja Adityadharma と出てゐる。而かも亦、後に述べる如く、王が佛 Dhyani Buddha を信じてこれがために七重僧院を建立するてふ記事を載せてゐる。若しこれを或

る學者のようにボロ・ブドウールのことだとするとこの佛は *dhyanī Buddha* であつて、かの釋尊の *Manushi Buddha* の外に立てんとする形而上學的理想佛であるから、大乘でも後代に屬するものである。さすればこゝに直ちに義淨の純小乗有部説と抵觸する。特にメナン・カーブは佛逝國に最も近い所である。而かも寄歸傳が其處で書かれたものである已上、決してこの二證は兩立を許す餘地がない。こゝに我々は一般考古學者に反矢を向けるか、さなくば義淨が皮相極まる觀察の報告は巧みに我々を欺いたものとせねばならぬ。かの刻文の七層院を八世紀後半以後に出來たボロ・ブドウルと結び付けてかの年代を降すてふ的證の提供せられざる限りはこの一材料を以てこのボロ・ブドウルに歸し始めより大乘が傳はつてゐたと推斷するも亦却つて擔板漢であらう。何んとなればこの五定佛の思想たるや決して五世紀頃<sup>(致七)</sup>に存在してゐたとは考へられぬからである。併し義淨の大唐西域求法高僧傳<sup>(致十五)</sup>などによれば既に八世紀の半頃大乘涅槃經も存したるものゝ如くである。だから予は決して純小乗敎と限定してしまふことは出來ないが少くとも六世紀の終り頃まで約二百年間は——よしんば二三の大乗的因子が存在したとしても——之れを原始佛敎の時代として差支へないと思ふ。

### 三 (A. D. 603—A. D. a 900)

今我々が大乘佛敎の時代を考へる前に再び本島の口碑及文字傳説を考査しなくてはならぬ。そこ

で先づ我々は所謂アジシヤカの傳説として有名であるものを擧げねばならぬ。之に就いてはラツフルスの紹介してゐる *Aji Jaya Baya* の記録にはダマル・マヤ没して其國衰ふるヤアジ・サカ外國より來るを傳へるのみであるが、他の傳説書には詳しく載つてゐる。今此等ジャクソン氏 *Jackson* が *Bombay Gazetteer* (1896) Vol. I. 1. に載せてゐる論文とを對照して其大要を示すならば次のようである。

グジェラト國は阿剌樹那以來連綿として數代相繼きたりしが、是處にシヤカ五二五年 *Bala Achar* 王に至つて國運漸く傾きやがて廢滅に歸せんことを豫知するや、アジ・サカなる箴書をもつし、王子に之を授けて他に殖民せしむ。王子は父王に附與されし從者五千を將ひて六船、百舟を以て鵬程萬里四ヶ月餘にして一島に着しぬ。(私考、錫崙島?)。されどそこはアヂ・サカ書と一致せず乃ち目的の殖民地に非ざるを知りて更に航行數ヶ月遂に瓜哇の一海岸に着し幾多の困難と闘ひて中央マタレムに到る。(マタレムは現今のブロゴ河とマンチンガン河一帶の流域地方を言ふ)。こゝに一王朝を創し自ら *Sawéla chala* 王として *Medang Kumulan* 即ちブランバンに都す。(今これを便宜上マタラン朝と言ひ或はブロ・ヴィジャヤ家とも稱す)かくて王子は謂へらく、我が國をして一層基礎強固にし、之れを發達せしめんには現員にては猶ほ足らず。如かず、本國に増員を乞はんにはど。よつて彼れに使を遣る。父王その志を嘉みし更に民二千を贈りけり。此の時に當りてジャワの王國有名となり、廣く海外に故國グゼラートは固より他邦との交通開け、今やマ

タラムの灣は各地よりの船輻奏するに至れり。

かくてこの釋迦五二五年は泰西史家によつて西紀六〇三<sup>三</sup>とし (Jergussun; Indian and Eastern Architecture P. 644)、もしこの時のグゼラートをば現代の地域だとすれば——カチアワルも含めて——この地は最も佛教に有縁の地であり、西域記十一には此の地方には伽藍も僧徒も多く特に阿折羅大寺は堅慧等が法性論、法界無差別論、入大乘論等を述作した所であつて玄奘の時代(西紀六三八頃)は那爛陀と相並んで教學の中心地であつた。勿論この堅慧と法界無差別論の著者と及び入大乘論の堅意とに就いては同異の論あるも今は同一人の説に隨つてをく。果して堅慧が此の地で入大乘論を著したとすればそれが素材となる經典、菩薩藏經、首楞嚴經、十地經、大喻經、賢劫三昧經、結解脫經(入法界品)華首經、如來藏經、智照經、大莊嚴三昧經、本生經、如來密藏經等より、華嚴維摩、寶積、彌勒、莊嚴、涅槃經等の主要大乘經典も少くとも六世紀には悉く此の地に行はれてゐたものであらう。予はこのアジ・シャカの母郷をば當時盛んに海外に活躍し貿易を主業としてゐたバラビ Valabhi 國であると推定する。そのシャカ紀元を採用せしは大月氏の後裔であらうか、たとひ然らずともスミスの印度古代史によれば已前彼族が永らく此處を支配してゐた賜物でもあらうかそこで吾人にしてこの瓜哇傳説を信用するならばかの移民の際、建築師 Jalma-tani、工匠 Jalma-undagi、本草學者 Jalma-ujani-dudukan、書家 Jalma-Pangniariti 及宗教家 Jalma-Pedandas 等がゐたから恐らく

これと共に佛敎特に此等重要なる大乘經典も持ち來らされたものであらう。かくて其後八世紀以後になされたるボロ・ブツールの大事業も、之れ等の子孫の功績に歸せねばならぬ。而かも予はスミス氏等の考へてゐるように五世紀以來八世紀までの個々の時代に、個々の移住者中佛敎の素養ある技師によつて完成されたものとは思はぬ。又、ラッフルス氏等のように印度本土よりわざ／＼雇ひ入れた建築家によつたのだとも考へられぬ。凡そかゝる莊重な建築は國家的大事業である。それが完成の裡には絶えず國民の協同一致の潑刺たる活力と強く且つ深き信念の血潮が流れ溢れてゐたことを物語るものである。普遍妥當の生命なき單なる個々の移民が大陸ならざるこの小島に於てどうしてかゝる大事業をなし得よう。又、單なる本國よりの雇入れ大工の技でないことはこの建築に於て個々の形像に於て或は多少、かの十一世紀 Chola 王の保護の下に成就した南印度タンジョール寺院のそれに近いとは言へ、また偶々ブラウ山から發表された大英博物館藏の文殊が摩訶陀國より出たもの (Foucher ; Iconographie B, pt. II, P. 43, fig. 3) と類似せるとは言へ、全體の上に於て殊に佛像の女性的體型にして、えも言はれぬ美を保てる所など寧ろ強ひて例を外國に取らば之れを支那に覓むべくとも、到底印度本國には見ることは出來ぬ。故に我々は此等をも亦先述の大移民者に歸せなければならぬ。況んやその文字が北方、西方印度、特に五六世紀頃グゼラト地方に行はれしそれに最も近くあるをや? (Grundriss der Indo-Arischen philologie und Altertumskunde に依る) 勿論これはキャ

ムベン氏のように Turki-Saka が健駄羅、更にグゼラトのカチアウル地方にゐてそれが此の島に移つて文化を作つたのだからタキシラの大塔、Takht-i-Fahi や迦濕彌羅の希臘佛教遺趾と最もよく似てゐるなど一足跳びの結論は學問の良心に咎められて出來ぬが、會々此の種の傳説が緬甸にも安南にも濕羅にも存するは一層この確實性を益すものである。特に暹羅の記録をステッヘン氏に依つて見るに (A. Steffen; Art No 125) 『摩訶六〇七年に大政變一度び全印度に起るや人民はこゝに早くも安住すべからざるを悟つて擧つて遠く故國を後にし他國民の間に移住せざるを得なくなつたが、その際大多數を有してゐた四婆羅門族はバニララからして途を東方に取りてビルマ、ベグ更に其處より進んだ一群はシャム、カンボジャ等に來た』とあるのもこれと同一の事實を指すものなるべく、その政變とは、當時印度は無政府狀態に陥り、北に匈奴の侵入、更にハルシャの建國プラケシン二世のデカンより北方侵略を指すもの、更に摩訶六〇七年（西紀六八五）は暹羅に定住するに至つた年代であらう。（因みに瓜哇文字と現今緬甸文字と最も能く似てゐるはかゝる姻戚關係からであらうか）。

問題は先きに歸つて、或る傳説にはこのマタレム朝が佛教を國教とした旨を記してゐるさうであるが、何れにしても我々はこの大移民即ち國家的殖民團が彼等の間に行はれてゐた大乘教經典とその思想とを傳來したと考ふれば、古來の美術學者のようにボロ・ブズールに對する文獻上の素材の

出處を探るに汲々としなくともよい譯である。但し、五佛とか *Dhyani Buddha* とかは後代に於ける輸入の賜物である。兎に角、予は如上の考證によつて六〇三年を以て本島に大乘敎の公傳せるものと認むる。さすればかのメナム・カーブ刻文に大乘思想の見えてゐるのも稀しいことでもなからう。但しこの五定佛の七重僧院を以て直ちにボロ・ブドゥールに擬するは年代に於て一百年餘の差があるから不適當である。そこで私はこの時代瓜哇中何れかの地に、宛も佛陀伽耶大塔の原型が雀離浮圖であつたように（小野玄妙氏、『健駄羅佛教美術』による）、今も亦、ボロ・ブドゥール大建築の原型として何等かのものが存在してゐたと見た方が穩ではないかと思ふ。不幸にして我々は、熱帶地方に於ける天候と植物の繁茂、そして屢々起る地震海嘯のために今日彼の地にこの種の遺物に接することは出来ぬが、かゝる大建築が何等の先蹤準備無くして突然作り出されたとするよりも寧ろ前者の考へ方が自然であらう。然らば何人によつてこの五定佛の思想が齎らされしか。顧ふに先きに述べたようにプランバーナン王朝が益々榮ゆると共に海外諸洲との通商盛んになつて多分七世紀の後半が八世紀の前半に南印度邊から輸入したものであらうが、之れが文獻上の證左としては八世紀の初めなる金剛智不空に歸せなければならぬ。金剛智は南印度摩賴耶國の遣唐使米准那（プラクリットにて *Majjhina* 梵語にて *Madhyana*）と共に支那に至るの途次、五ヶ月間闍婆に滞在してゐる。（西紀七一八）。この期間に於て如何程傳導土の効果をなしたかは問題であるが、こゝに不空なる



弟子を得てをるより見れば、彼れはこの短日月をも決して空しくは消費せなかつたであらう。(貞元錄 宋傳 趙遷行狀 參照)。して見れば或は『五定佛』も此の人の遺して往つた土産でなからうか。

遮莫此の地より大廣智不空を出したことは正さに特筆大書に價する。顧つて今日我が國の眞言宗を見るに勿論大日經及疏に負ふ所甚大であらうが 事實に於てそれ等は寧ろ殆んどすべてが不空の流れを汲むものである。試みに台三東五の入唐八家に就いて見るに獨り傳敎を除いては他は慈覺にしる、智證にしる皆その衣鉢を彼れの後裔に承けてゐる。而かも不空が實際上金剛頂系密敎の大成者であるを知るとき我々はいよく彼れの出身地ジャワに對しては無感心ではゐられぬ。勿論、單に彼れを出したと思ふに止まつて何等この島思想が彼れを産んだのではないけれども、さながらマホメットに於けるメツカの如く密敎徒に取つては永久に忘るべからざる土地であらう。猶、不空の傳記に對しては異說無きにしもあらざるも、先づ彼れが錫崙で生れ、(貞元錄、良貴仁王經疏) 幼少の際親に離れて舅氏につれられてジャワに來り、十四歳、金剛智に初めて師事したと言ふのが最も事實に近い。併し何れにしても我々はまだ此の時所謂金剛智の純密敎が此地に行はれたとは早斷出來ぬ。

さて我々はボロ・ブドゥールに遷らう。序でだから少しこれを紹介するならば、此の遺跡は瓜哇中部ジョギヤカルタ(東經一一〇、南緯八)町の西北約三里餘の所にある。この高莊な建物は小高き

丘に、將さに没せんとする斜陽に閃き互る棕櫚の林もて蔽はれしプロゴの曠溪を東方眼下に睥睨しその向ふには宛も是等を監督するものゝ如く巍々として聳ゆる一萬呎の高峯灰山メルパヒ、火山より噴く火焔の流れと相和してその壯觀はえも言はれぬなど、歐洲の口さがなき旅行者によつて徒らに吾人に垂涎の情を催さしむるのである。詳しくはクリン氏の『ボロ・ブドール』を見るべきであるが、實際美術研究者は無造作にガンダラ アマラバチーのそれ等と互角的に取扱つてゐるが、これがよしんばその素材としての粗糲な火成岩がカンボジャのアンコル・バットの精選せる沙岩に比して餘程體裁を損減するとは云へ、その高く且つ深き巧妙さは觀賞者をして驚嘆せしむべく、その塔龕中の一々の像の相好に於ける如何にも溫厚柔軟な表現は如何にその民族、その時代その國が安泰であつたかを物語るものである。して、これが屬する佛教に關しては Krom; Beschrijving von Bata Buçur P. 769 に Het Buddhisme Van Barabudus とふ題下に考證してあるが、私も多く之れによつて述べて見よう。

予はこの遺跡は確かに千佛堂であると思ふ。元來この千佛堂は佛教史上に於ても美術上に於ても最も興味あるもので、かの燉煌のは固より西域各處や西藏等にもこの千佛堂ミルパヒなり洞なりは極めて多く存在してゐるさうである。これはボロ・ブドールなる名稱そのものが既に證明してゐる。何んとなればボロは瓜哇や婆里では『多』を意味するから、千佛の千が必ずしも數字の千 Sewu でない

以上、之れをも千佛堂と譯しても差支へない。また他の一面には之れは一大曼荼羅である。換言すれば諸尊嘉會壇の大曼と羯磨曼である。唯、その土地が印度や支那でなかつた爲めに未だ雜多の密教思想は弘布してをらぬがこれが釋尊を中心とし、四佛を四方に配する處は藏蒙滿にも……例せば乾隆開版藏經内表紙の小曼荼羅の如き——多く見るのと諸尊の種類の多少こそあれ全く徹を同じうするものである。故に我々は之れを本島に於ける第二の密教思想胚胎として注意すべきである。更に今一面、これは佛教々理大系の客觀的象徴的具體的表示であらねばならぬ。即ち藝術の上に映し出された眞の意味の佛教概論である。その中、特に延長無慮三哩に及ぶと稱せらるゝ四重廻廊に施せる二千有餘の浮彫には所謂外道あり、また本生經、譬喻經、普曜經あり、また華嚴入法界品を始め文殊、普賢、彌勒、觀音等に關する思想あつて而かもそれ等が中央なる佛陀に統攝さるゝ形ちに於てあるを見る。して、これが思想素材の多くはマタレムの移民が故國より持來つたものなるは先述の通りであるが、若し我々が堅慧の入大乘論を以て序論とするならば正さに之れはその結論でなければならぬ、で先づ我々がこの考へを以て、四重廻廊を横きつて中央部の第一臺壇に登り往く時認めらるゝ圓露臺の最上部にある鳥籠のような多くの塔龕の中、東方に於て東面してゐるのは阿閼佛、南方にあつて南面するは寶生佛、西方は阿彌陀佛、北方は不空成就佛であるのは容易に了知せらるゝ。さすれば我々密教の考へから推せば最中央の塔には大日が見えすが今は却つて未完成の

佛像がある。これに就いてプレイト博士は千古の謎だと言ふし、一般學者は之れをアデイ・ブツタとするが元來この佛の思想はグリュンエーデルによれば十一世紀とするが我々の考へでは十世紀早くて九世紀後半まで登るまいし、且つそれが萬有能生の超在的權能ありとしたのは恐らく尼波羅アイシユバリカ派成立後であるから、若し此の建築をば八世紀及九世紀に歸するならば之れを元始佛とするのは無理である。で、ケルンは胎内佛即ち母胎に在る菩薩の暗示だとし、ウィルソンは未成佛の模型だとしてゐるが、予は之れを釋迦佛の自覺内容即ち本有淨菩提心に契證せる祕密心地をば降魔成道の形態に於て象徵せるもの、その未成の形らに於てあるは自内證は甚深不思議の境界であつて因人の窺知を許さぬを意味する。だからこれを安置せる塔も萬古の祕密を藏するものゝ如く決して歐米の異教徒探險者の手にかゝる今日まで開けられなかつたのである。さすれば四周の諸佛もこの釋尊の内證三昧より流現せるを詮す故、皆内側でなしに各々外を向いてゐるのであらう。この點に於て不空の三十七尊出生義などに於けると同一徹である。又般若三藏譯の守護經のように一切義成就菩薩即ち悉多太子が勤苦六年の結果、降魔成道して大日となり、それより四佛を出生せる故、行者が之れに修入するには先づ不動三昧に入つて西向東坐して阿闍を觀じ乃至南面北坐して不空成就佛を觀じて釋迦即大日の證りに至るのだとあるに似てゐる。但し未だ此處には大釋同一てふ考へにまでは進んでをらぬ。して大日に就いては却つて第五列龕中の尋司契 *Vitarika mudrā* に於けるが

それだとし、或は廻廊中半開門の覆鉢内の轉法輪印 *dharmacakra mudra* の如き契印の尊をば之れに充つる。特に後者の如きは之れを轉法輪契だとして釋迦化儀説法の相だとすると、法輪印は印度、尼波羅、西藏の佛像に見るように——日本のは異なるが——左右の風指、空相捻じ、左手を心臓、右手を乳の上に置いて左の地を右の風空に接するもので、今のは智拳印の素始型として大目とする兩説があるが、予は前者を取るものである。そこでこれには多少議論の餘地もあるであらうが、予が度々言ふたように中塔のは法身即ち釋尊の純粹自我を直觀せるその心地、四方佛は之れに客觀型を與へて個々に表現せしめたもの、第五列尋司契は『反省』そのものゝ象徴であるから、つまり、我を觀るてふ反省の立場に立つて能所一如、還同本覺とでも言ふべき境地、これ大毘盧遮那如來でなくてはならぬ。そして廻廊中に在る佛はいよゝ直觀と反省の内證三昧より踊出して化他の説法に出でたもの、その結果こそ四重廻廊に施せる浮彫に跡づけ得る一代教でないではなからうか。し  
て見ればこれは轉法輪契で、右手はやはり法輪印にし、左掌を外向け第一指を右手に接しつゝ確か  
ブツダチャリタか何かにあるように『我れ一切を知れり、今汝等に之れを授けむ』と唱へて喬答摩  
釋尊が轉さるゝものであらう。因みに四佛の印契を出すならば、

東、阿 閼 觸地契 *bhūmisparsa-mudrā*

南、寶 生 與願契 *Vaṛa-mudrā*

西、彌陀 定印 dhyaṇi-mudrā

北、不空成就 施無畏契 abhaya-mudrā

である。

然らばこれは何時完成されたか。之れに對する學者の異説を一々述べてゐる暇がないが、プランデ氏の七七八——九二八（シヤカ紀元七〇〇—八五〇）頃だとするに基いて、予はかゝる事業は一時的になされたものでなく、中央部は先づ八世紀後半に着手されて漸次増加し、最後に十世紀の前半までに廻廊が出来上つて今日に至つたものであらうと考へる。ハッセル氏の *A Handbook of Indian Art* p. 161 も略々予の同意見である。

要之今日我々に殘された唯一の遺物を以てその當時の佛敎狀態一般を推察するならば正さに瓜哇千年史中に於ける大乘敎の黄金時代と言はねばならぬ。この時代は既にマタレム王朝の基礎も固まり、サエラ・チャラ王の苗裔アルデイ、カスマ、アルデイ、ヴィジャ相繼いで君臨し、釋迦八四六年（西紀九二四年）このプロ・ヴィジャ家の五代デワ・カスマ王立ち都を東端犬ヶ森 *Jambhaka* 戎牙路元史百六十二ノ八に遷すまで、このプランバーナンは大いに榮えたのである。此の間、佛敎は王家の尊信特に篤く、殆んど國敎の如き有様にて、別に印度本土のように瑜伽、中觀あるのでもなく、支那の如く十宗競ひ立つてふ刺戟もなく、特に民間に於てはかの宋史四百八十九十二に疾病不服藥但禱

神求佛てふ状態にて混渾たる大小乗教が行はれてゐたものであらう。一體波瀾なき所には最上の文化を構成することは出来ぬ。事起らざる文化の世界は竟に無味乾燥に滅びねばならぬ。進化とは一面鬭争である。『正』でなくして『反』である。『反』なき所どうして『合』の進展を見られよう。この意味に於て一器瀉瓶嫡々相承なご云ふは我が人文の世界に於て平凡を固執せんとする叛逆者である。今この瓜哇に於ける當時の宗教状態を見るに全くこれに似たるものがある。華は永しへに爛熳たるものではない。さしも麗はし笑ひ揃ひし佛教も亦、ボロ・ブドゥールなる碩果を結んでは決して再びほころぶべき蕾みをも生み出すことは出来なかつた。此處に至つて、今まで佛教に壓倒されてゐた婆羅門教は印度に於けると同様勢力を挽回するに至つた。こゝに後者は印度教(特に濕婆派)の型ちに於て國教としての地位を奪取し、その結果は竟に釋迦八四六年(西紀九二四年)デヴ・クスマ王の印度教留學生派遣となつたのである。これより佛教史の舞臺もかゝる背景の下に祕密佛教の時代と展開せざるを得なくなつた。因みに此の間シレンドラ朝にチャンデイ・カラサムが建てられてゐるが(或は七七八年に)大いして問題にする程のものではなからう。

#### 四 (A. D. 924—1478)

この時代は政治上に於ても極めて多端な期間であると共に建築史、美術史、乃至考古學上最も學者の興味を惹起する時代である。そしてまた我々は此の島に於ける密教思想の傳播時代として、密教

流傳史上に於て、はた我れとの比較研究の上に於て最も注意に價する。唯、我々は餘りに叙ぶべき事多くして、特にこの部分のみに於ける細考察が却つて前後の平行を失するため本題に添はざるを遺憾とする。

先づ、前節に一言してをいたデヴ・クスマはシャカ八四六年婆羅門教（蓋し印度教の濕婆派？）を學ばしめんために四公子一王女をば印度のクリング（或は南印度のカリంగా）に遣はし、その長子は一印度王女と婚し、茲に多くの學者宗教家建築家と養父王に贈られし護衛兵とを將ひて還つてきた。こゝに印度との交通盛んとなるや本國と相呼應して、この熱心なる王子及幾多の傳道師によつて漸次印度教は弘まり、それにつれてかれと最も共鳴する點多き密教思想もごし／＼輸入されたのである。蓋しこの輸入は此れより第三代の王バンディ・ケルタバタイがわ／＼印度王女を後に迎ふるに至つた時を頂上とする。かくて都は先きのデヴ・クスマの時、既に犬ヶ森に遷されて政治の中心は東に移つてゐたけれどもやはりその後十一世紀までは文化は依然として中央部即ちジョクヤカルタよりサマラングに至る云は／＼近畿地方にも亦榮えたのであつた。

然らば何故王はわ／＼東端に遷し、佛教に代ふるに婆羅門教を採用するに至つたが。未だ予はこれが文獻上の證跡を發見はしないが或はこゝに我が桓武帝が爛熟せる寧樂の都とそして舊佛教とを捨てつゝ新しき洛陽とそして宗教に依られたと同一般の事情が潜んでゐるではなからうか。



かくて我々は丁度この初期の産物としてチャンディ・メンドット（チャンディは寺の意味）を挙げ  
る。これはボロ・ブドゥールを去る約三十餘町の所にある。基礎約十二間平方高さは約二間半の小  
堂でその結構に於てまたその殘存の程度に於て到底前者の比ではないが、それが佛教史資料として  
の價值は決して劣るものではない。何となればこゝに最も濃厚に密教的色彩を伺ひ得らるゝからで  
ある。げにフェルガワソン氏も言ひけん如く、この建築こそ佛教家をして見せしむれば我れに屬す  
とすべく、印度敎家をして就いて語らしめば我が濕婆派に屬すと斷すべく、猶ほ又耆那敎徒にして  
之れに接せばそが自らに多く似てあるを疑ふであらう。實際學者の間には之れを佛教建築と認めざ  
るものもある程である。その四面の壁に施せる凸形の彫刻に至つてはフェルガワソンをして印度建  
築上の最上乘であると言へしめた程である。併し我々は此處に於ては美術的鑑賞を擅にすることに  
許されてはをらぬ。唯、與へられし遺物によつてこれが如何に佛教思想を表現せんとしてゐるかを  
ば跡づければ充分である。（但し之れの叙述は今便宜上後欸に譲つてをく）

さて前述の如く婆羅門敎の復起隆盛と共にかの有名なるブランバナンの千堂寺は建てられたので  
あるが（西紀一〇八八）我々は爰にその當時十一世紀以後の政治狀態につき一言せねばならぬ。この  
時代は宛も支那に於ける六朝のそれに等しく瓜哇は全く四分五列し、先づ犬ヶ森にはアミ・ルクル、  
ケデイリにはレムブ・アミ・ジャヤ、カラヴンにはレムブ・アミセサ、そしてシンガ・サリにはレムブ・

アミ・ルエウ朝等並び起つた。この中我々は僅かに十二世紀の後半にこのシンガサリ朝に佛教に對する尊崇の情甚だ篤かつた王があつて、今日メランのボロ・ブドウルと呼ばれる、シンガ・サリ寺の建てられたことを知り得るのみである。(猶此時代の世相は東西洋考三ノ二に就いて見られよ)。

かゝる間に、太平千歳まごらかなる瓜哇人民の夢はいたましくも元の侵入によつて破られた。元の世祖が世界征服の大野心の前にあはれ南海の一小島も亦その犠牲とならざるを得なかつた。(これに付き、アデ・デチャ・バヤの集成傳説には釋迦一三〇一年と頗る年代を遅くしてあるが、アデ・マンガラの集にはシャカ一一五八年(西紀一二二六年)として少し早すぎる。今元史(二百十左)には至元三十年(一二九三)としてあるを正しと認めてをく)。至元二十九年、元は使を此處に遣し、朝貢を促したが之れを拒否したので翌三十年三月大軍を以て攻め入つた。而して之れが先導をなしたものは實に士卒必闍耶(Bio vijaya, Jaka Susuru 又は Bio vijaya chiong Wanūra)であつた。今少しこの事情を云へば是れより先アミ・ルフルの子バンデ・スリア・アミ・セサ出で、處々の小國を統一し、その嗣バンデ・ラレオウに至つて都をジャンガラよりバジャシャラン(Pajajaran)に遷した。之れシャカ一二〇〇年(西紀一二七八)である(アデ・ジャヤ・バヤ記)。然るにその後間もなく哈呷葛當Aji Kuda Nagari王のとき元の侵入となり、かねて野心を懷きし、同じく一族の出にしてマジャバイト(洋考作麻喏巴歇)の部將士卒必闍耶は彼れに内通して共に答哈葛郎Patajaranを都を攻めて之れを降した。併し翌年

には幸にも世祖の死によつて茲に支那軍が撤退せざるを得なかつたが、これより瓜哇はより一層劃然と東西に分割さるゝに至つた。西は先きのバジャジャランを中心とするスンダ、朝東はマジャバヒツトの朝である。前者は専ら農業開拓を主とする保守的傾向を持ち特に哈喇葛當王の如き農の増進者として知られ、後者は支那、印度等諸國と交通して浩く新知識を海外に覓めた。その結果、文化は大いに東方に隆え印度教及それに關聯する藝術百般は空前の盛況を呈するに至つた。(史弼傳參照)。

かくて今日存する幾多の遺物遺跡——例へばバナタラム寺、チャンデイ・キダル、ロロ・ジヨンラム、グノン・ガンジル、チャンデイ・ジャーヴィー、チャンデイ・カリ・ベニン、チャンデイ・バーリ、チャンデイ・キダル、ジエン・プラトウ・スク、チャンデイ・ジャゴ、チャンデイ・カーリ・サーリ、グーノン・デイエン、グーノン・プラウ、ジャガ・ラーガ、チャルバン、ラーワ、カラーン・ブレット、トレンガリー、ブラナーガ、モゲタン、マデイオン、ケルタサーナ、スレンガツト、アンジョグ、ブレベツグ、ツムンゲン、センツル、ブルズン、ジャグ、スーク、ゲドツグ及ナンガンのランヅ・グンチングの諸寺堂は(Nāgarakriṣṇana's Catalogue of the Stūpas 參照)この時代及其後に續々と建立せられ、特に印度教隆盛の極、先きに言へるバンデイ王の如き、毘紐拏の化身、その第二后をば吉祥の權現として Devī gauri の尊稱すら捧げられてゐる。これかの西藏佛教に於てスロンサンガンボ王をば觀音とし、その妃をば多羅としたのと同一致である。但し Tissamahī, Cambridge et Java P 126

にはブランバナンのカリ・ディニン、カリ・サリは西紀七七九より始まることす。

かゝる際に當り、東部地方に於ける佛教の勢力は實に微々たるもので前述の如く我々は纔かにシ  
ンガサリ即ちマラン附近と隣島マドウラに行はれたことを跡づけ得るのみであるが、反之、中央部即  
ちケドウ Medoe 洲及サマラン州等には可なり盛んであつたことが知らるゝ。今日此の時代に屬する  
ブラウ廢墟や其他建築彫刻の發見せらるゝもの頗る多く、而かもそれ等が殆んどすべてが祕密佛教  
的色彩を含んでゐる。今試みにその主なるものを叙べて見よう。

一、佛部の尊。ボロブドール佛像に於ては四方佛と定佛の思想の外、すべてに於て所謂純密佛教  
とも言ふべき點は認められなかつたが、今や我々は此處に最も代表的のものとして金鑄の金界大日  
を有する。五智の寶冠を戴き、胸前に智拳印を結び、その種々の莊嚴をもて身を嚴飾せるなど殆ん  
ど我が日本のご異ならぬ。傘蓋や火焰の光背は中印度のそれを聯想せしめ、口形の雲形飾りは却つ  
て支那の影響を疑はしむる。その形像の優秀な事は後の般若女尊と兩性好一對に賞歎されてゐる。  
次にこれに少し見劣りはするが今一つの像がある。寶冠なく、身相莊嚴少く、智拳印稍々下方に結  
び、左肩に袈裟を著してゐる。其他、阿闍尊や、ディエンより發見されたアディ・ブツグと思はるゝ佛  
像など、要するにこの時代、純密金剛界の思想が此處に行はれてゐたことが想像される。但しブラン  
デス博士の (Brandes; Archeologische onderzoek op Java) に依るに最初煉瓦の素地とこの種々な装

飾を施せる外石壁の完成とはその間略々一世紀を隔てゝゐる。(Dr. T. Vogel; B. E. F. O. IV 参考)

二、佛母。金剛界曼荼羅に於て大日の四親近たる金寶法業の四波羅蜜が四佛を能生する抽象的な考へ方は吾人の既に識知する所であるが、佛生の具體的な尊としては佛眼母、准胝母、般若尊などが崇拜されてゐる。この佛眼尊は佛頂尊と共に佛體の部分的崇拜であるが、此の島にも可なり流行し今日バタビヤ博物館に藏する (Dr. Groneman; Catalogue No. 248)°。又准胝は既に前記のチャンドイ・メンドウトに二種の尊像を有してゐる。一つは東南外壁の凸彫で、八臂の尊と今一つは同じく西南面壁の主尊として二龍王の支ふる蓮華に坐し、一面四臂で (Foncher; Indian and Eastern Sculpture P. 651 に依る) 嘗てフェルガツソン氏をして恰も印度建築上最良期に於けるものゝ如く精巧且つ優美なものであると推賞せしめたものだが、今之れを錫崙製の四臂像 (大英博物館藏ラッフルス・コレクション部、九世紀頃の作と謂はる) とその持物に於てのみ異なつてゐるが、更に金剛智の七但唇佛母經(閩十六十一)を披くに己が意志の要求によつて兩臂(不二門)、四臂(四無量)、八臂(八正道)、十臂(十地)、十二臂(如來普遍廣地)、十八臂(十八不共法)、三十二臂(三十二相)、八十四臂(八萬四千法門)を各々象徴的意味を持たせて出してゐる中、今日本には十八臂尊しか有せぬが、其他の四臂八臂などもこの時代既に南海には實際に具象的な像として存在してゐたことが知らるゝ、更に般若尊は勿論、般若經に於て般若波羅蜜をば佛の師、母と説けるより、佛母と敬はれ、一轉し

て偶像の型を與へられ、竟に密教思想と密接に結合して、之れが最も重要な地位を占むるに至つたのであるが、バタビヤ博物館にはその最も優秀なものを藏する。ハーベル氏は嘗て此の寫眞を公刊し、自ら『洋の東西を通じて如何なる藝術中にも最も優秀な靈的創造の一としてかのジョバンニ・ベリニのマドンナに勝るとも劣らぬもの』と賞讃措く能はぬものである。而かも之れは仁王護國般若波羅蜜多經上(開三七左)に『其菩薩像結跏趺坐、白蓮華上、身黃金色衆寶瓔珞、徧身莊嚴、首戴寶冠、繫冠白繒兩邊垂下、左手當心持般若梵夾、右手乳作說法印以大拇指押無名指頭』とあるに一致する。但し今は般若梵夾を缺いてゐる。因みにこれは稀れにも東方シンガサリで發見されたのである。

三、菩薩。菩薩の代表として文殊觀音の二種を擧げよう。而かも此種の中ボロ・ブヅール廻廊彫に出づるような顯教一般の型は除き、特に此の密教時代前後に屬せらるべきものゝみに止めて置く。文殊に就いてはチャンデイ・メンドウトにある二像が青蓮の上に智劍と同青蓮上に般若梵籙を持てるは偶々我が金界賢劫十六尊中のに最似してゐるが更に大英博物館藏(ラッフルス・コレクションの部)の四臂像は最も注意に値する。サマラン港の西南約四里、グノン・ブラウ Gunung Prohu 山の七百尺の高地(此處には現在でも無慮四百の殿堂の跡が存してゐる)附近から出て九世紀乃至十一世紀初期のものに屬する。丈僅かに五寸六分であるが、その未敷青蓮華を手にし已開青蓮上に憩へるによつてその文殊なるは立證さるゝ。特に臺座には九世紀前後に行はれた古瓜哇文字もて有名

な因縁偈が刻んである。この偈は最も有名なものであるから、マハーバツガ始め他の巴利藏經、漢譯では四分律、五分律等に出てゐるが、最も此刻文に近いのは寧ろ祕藏記(全集二六頁)に法身偈であるこれを眞言宗では八祖口傳としてゐるが、予も亦單に之れを東密家が四分律より取つたとするよりも、日照譯の造塔功德經にあるように起立塔像の際、常に此の單偈を誦することが當時南印度や錫崙に流行してゐて、それを瓜哇に傳へ、また金剛智、不空により支那に紹介され惠果によつて壇の口破に適用さるゝに至つたのでなからうかと想像はやたちに擴がつて往く。猶ほ同館藏の所謂 *Ma-jarjalla-manjus'ri* も亦ブラウ山から出たもので前と同期のものだが別に特筆すべきこともない。

又觀音に就いては既に南印度摩刺耶海岸に深き根據地を有してゐた觀音の信仰が錫崙や瓜哇等の南海諸州に傳播したことは極めてあり得べきことである。ハベル氏の出せる印度美術提書五十七A圖の最も優秀なるものを初めとして今日でも此島に最も多く此等の像を發見さるゝけれども西域や支那、日本に見るようなごく變態的のは稀である。唯我々はチャンデイ・メンドウトの四臂像と、不空絹索尊像とを代表的に擧げ得る。就中、不空絹索尊はマランの附近、チャンデイ・トゥンパンのほとりに立てる六臂像で、かの龐大な菩提流志譯不空絹索經中、第二十二卷(四十二卷七左)の所説と同じである。その如何にも細長く、軟々しき莖の蓮は最も此地方に於ける美術的特色を現してゐる。特にその刻文に聖不空絹索世自在尊像 *Bharala Āryaṃoghapasā Lokas'vara* といふの頂上に『無量光尊像

とあるは面白い。又ブラバナン舊跡から出た八臂像は頂上の尊、持物等よりしてハベル氏のように観音と認め、ディエンよりの六臂の坐像は之れを我が室生山のそれに對比して如意輪觀音と斷定したいが、その出處よりして寧ろシワ像とするが穩當であらう。果して之れをシワ像としても既に佛像と何等區別さるゝなく、以て此の時代に於ける佛、濕兩敎の關係の密接なりしを推知し得るに充分である。但し多羅尊に至つてはその信仰の隆んなる西藏に亞し、既に早くも八世紀後半の年代にKlissan にその殿堂が建てられバタビヤ博物館藏(Groneman's Catalogue No. 112<sup>3</sup>)の毘俱伽形毘伽の尊とかの“Barhala kiti”のデワ・ナガリ銘ナガリ(バルハラは梵のブラーラ・マレイ語のバルハラと同じく像の意味)ある四臂像等が現存中最も有名なものである。またバタビヤの金剛薩埵像も此類の中見るべきものゝ一つである。猶ほ毘但底忙莽鷄毘但底忙莽鷄に就いてはプランデスA. O. J.を見よ。

四、明王。密敎特有の尊とも言ふべき忿怒明王も亦可なり流行し、バタビヤ博物館には馬頭尊(Groneman's No. 79<sup>3</sup>)や同じく降三世尊は實にその代表的のものであらう。特に後者は現今三體を存し、他の一は大英博物館、更らに第三のはライデン人種學博物館藏に係り、共に三面八臂でその姿勢は我が日本に見る以上に極めて能く敎令輪身の性格を表し、降三世軌(閏十二右)、仁王軌(閏十二右)、壽命軌(閏二十三右)、本軌(餘五十八左)、千手軌(閏四十二左)等の經軌所説と略一致する。バタビヤのは博物契印に於て多少異なつてをる。



五、天童。現存の遺物よりして我々は辨財天、毘沙門天、摩利支天、俱毘羅等廣く諸天等部の尊が崇拜されたことを跡づけ得るが此等は果して佛者が印度敎者の何れに屬すべきを査定するのは困難であるから今之れを略する。(參考、Brand's *Archaeologi casch Onderzoek op Java Vol. II.*)

以上、多少煩雜であるかも知れぬが此の時代に屬する密敎化せる像を一瞥した吾人はこの島が密敎に於ける重要な諸尊を有することによつて自らこゝに行はれた眞言敎の程度を推知し得ると共に此等の殆んど充てあらず他の時代を通じてその質に於て最も優秀であり、その量に於て最も多數であるに驚くと共に其等が僅かに數個を除く外はケヅ・サマラン兩州より發見されたものなるに注意せしめらるゝ。これ他なし、予先きに一言せる如く、この當時、濕婆派を中心とせる婆羅門敎東方に榮ゆるに當り、中央部には最もよく祕密化せる佛敎が行はれたるが致す所であつて、今日でもジョキヤ・カルタよりサマランに至る約三十里が間の地方は宛も我が近畿のように佛敎の古跡や種々の遺物を以て滿されてゐる。してこの兩敎の地理的區劃は政治と甚だ關係あつて、かのマタラム朝が最初佛敎を保護したる結果政權が東方に遷つてからも此處に此敎が依然として行はれた。

猶ほ此れ等の外、此の時代に屬すべき文獻上幾多の遺物を存する。Speyer 氏の努力は常に吾人に最も興味ある收穫を傳へてくれるが、就中 *Ein Aljavanischer Mahāyānistischer Katechismus* (Z. D. M. G. LXVII. 2.) には金鑄偽明鏡偽其他密敎に最も關係ある偽も多く紹介されてある。加之その重要

の程度に於てはたその結構に於て我が要略念誦經大目經第七卷にも比すべき密教供養次第法なる Sang Hyang Kanahyānikan (古瓜哇文) のテキスト及コムメンタリーは發見せられ、次いで Kās 氏によつて既に上梓せられてゐる。併し遺物は之れに止まらずしてまだ定めて少なからず存してゐると思ふ。此れに由つて之れを見るにかゝる輕軌の瓜哇譯は續々發見さるゝ種々の密器と相俟つて、該期を通じて該島に行はれた密教は單に諸尊崇拜に止まらずしてその實際的修法も可なり如法に修せられてゐたことをば必ずしも今日猶ほ婆里島に存する『ベダ』(行軌書の意味) 及『マベダ』(修法のこと) より選取還元せずしても最も雄辯に立證するものでなからうか。ジャンガラ朝デヴ・クスマの新進印度教の影響を受けしことは東部よりも比較的寡かつたと見ねばならぬ。こゝに於て此處には佛教が主格となりて漸次印度教の分子を取り入れ、彼處には逆に彼れが優占者の地位に立ちて此れの影響を蒙ること甚大であつたことは必ずしも確然たらぬにしても大體の傾向として差支へなからう。

會々十三世紀の終り頃マルコポロは己が見聞録に於て海事に熟通せる航海者の言によつて『世界最大島周三千哩に餘れる獨立一王國として人民は嘗て他に朝貢せしことなく總て偶像の信奉者である』ことを記してゐるが此れはとりもなほさず偶像禮拜を根本義とする印度教及祕密佛教の隆勢なるを意味するものであらう。

併し我々は他の一面に支那文化の影響の少なくないことを忘れてはならぬ。蓋し、元の侵入は纔かに一年餘ではあつたが、その後稍々支那との交通開けるに及んでその感化を受くるに至つた。我々はボロ・ブドゥールの佛像を以て直ちに彼れの影響であるとの説には左祖出来ぬが、バタビヤ博物館藏の多羅尊の如き明に東方風を多大に加味し、更に俗信仰即ち道教思想が入つては印度教の神をしてかのブランバナンの濕婆像や *Kaphtaten van de Commissie in Nederlandsch-Indië*, Pl. 31 に出づるもの等のようにかれの天神像と略んど選ぶ所なきまでにした。特にシヤカ千三百年アンカ・ウイジャヤ朝には彼れと交通盛んとなり、その結果陰陽道の思想も輸入され、シヤカ千三百十三年惡疫退散のため用ひた修法も寧ろ此の結果と見ねばならぬ。此處に於て我々は今や次の事實を想像し得る。印度本土を分水界とした東洋文化の潮流は一は南海の路を取つて該島に來つて印度瓜哇文化を構成し、他は支那に充份咀嚼されて彼處に産み出せし種々の思想は逆に南海に入つて支那瓜哇文明を生ずるに至り竟に兩々相混肴して茲に我々は興味ある輪環圖を跡づけ得るものである。

遮莫此の間に於ける此地の佛教とても決して惠まれたるものではなかつた。熱帶加ふに火山多き本島は殆んど天變地天の絶間がなかつた。シヤカ四九一の大地震を始めその文献に出づるものすら少なからず、また屢々なる遷都もその多くは恐るべき疫癘のためである。かのシヤカ九二七年、クダ・ラケアン、パカ王の時、再びメダン・クムランに遷都せる事情の如き最も悲慘なるものであらう

かゝる零圍氣中に在りし瓜哇佛教の文化も亦推して知るべきである。

かくて此の力なきものに最後の致命傷を與へたものは印度本土と同様回教の侵略であつた。これ西紀一四七八年にして、かの Raden Patah Adipati Timbun がヴィジャヤ家を亡ぼして、デマツクにサラセン王朝を創むるに至つた裡には一掬の涙に値する哀話があるが今はすべてを Freeman; History and Conquest of the Saracens に譲つてをいて、唯こゝに彼れ等がつれなくも我が同朋國を屠るに當つて、下層階級は恐るべき偃月刀の下容易く宗門をころんだが、上流即ち刹帝利、婆羅門族等は改宗を肯せず、東の方バリ、ロンボック島に亡命し此處に王國を支へつゝ人民は佛、印兩教双行てふ極めて安泰な宗教生活を續けて今日に及んでゐる。此の期間を假りに吾人は第五期と呼んだのであるが婆里の佛教については寧ろ稿を改むるが至當であらう。

要之瓜哇の佛教の歴史は前後千有餘年間の長きに亘り、この間多くの遺跡遺物を殘して徒らに冷淡な考古學者を歡心せしめつゝ極めて浪漫的に始まつてまた彗星の如く本島に影を沒してしまつた何れにもせよジャバスマトラ等の如き南海諸洲は宛も陸路に於ける西域のように佛教東漸史上重要仲介地點に位してゐる結果、よし彼地はごでなくとも幾多の思想や聖典などが流入したに相違ない。不幸此種の文献の今日に發見さるゝもの稀であるけれども、猶ほ學徒の眞摯着實な研究と不撓不屈の踏査とは將來必ずや一大光明を齎すものであらうと信する。徒らに資料の乏しきをかこつ前に我々は却つてそが探入の須要なるに奮起すべきではなからうか。(大正十四年一月六日郷里にて)